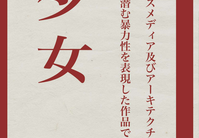
辿り着かない少女 ―誘導建築―

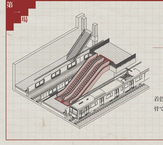
文明の発達によって得た利便性は、「マスメディア」「プロパガンダ装置」という媒介を通して、人間へ冥利をもたらす代償として自由を奪った。更には、自由を奪うだけでは飽きたらず、「アーキテクチャ」という物理的誘導装置を用いて人間の行動を操り、管理し始めた。そしてそれは現代社会の基礎として永続し、不要の混沌として焼き付いている。

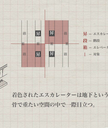
※この卒業制作は現代社会に生きる、マスメディア及びアーキテクチャによって操られた我々をアイロニーとし、其々に潜む暴力性を表現した作品である。

本作品では、「市民に対して『完全な自由』を宣言しているが安全も保証するべく、密かに市民を特定し、誘導、そして管理する建築装置を維持している国」で、我々の投影である「少女」が、ある映画を観に行くが目的のスクリーンとは別のスクリーンへ建築によって誘導させられる、という小説を用意し、その物語の展開にそって、一つの建築―「駅」と「映画館」―が立ち上がっていく。



分析 第一章 二種類のプラットホーム





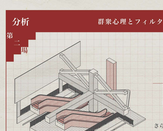
吞吞された エスカレーターは地下という無 竹で重たい空間の中で、際目立つ。

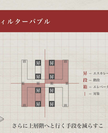
「あそこのエスカレーターを上って下さい。その先は順路が置いてあります。」

少し不気味な笑みを浮べているように感えたが、急いでいたため気にせずエスカレーターに乗った。しかしエスカレーターを上りきっても順路の表記は無く、代わりに従一行くエスカレーター付口前に、違っていないか少し不安はあったが、周りの人は違いなくおっているため付いていった。

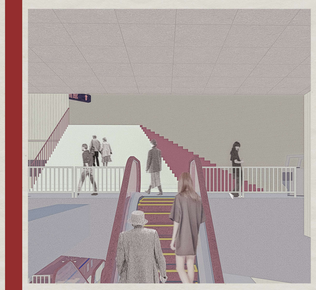
ふと「群衆心理」について調べたときの事を思い出した。あれは見上たインフルエンサーが関名の人々にSNSで誹謗中傷され、自殺するまで追い込んでしまったときだった。SNSやネット記事などやマスメディアのトレンドをおなじていたが、根拠に話したら「そんな記事は見かけなかった」と言われ驚いた思い出がある。

分析 第二章 群衆心理とフィルターバブル





さらに上昇間へと行く子供を減なすことで、多方向からという全ての人々を1か所に集い群衆となる。

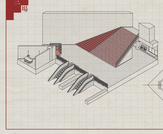


エスカレーターを降りても未だ順路の表記は無い。ただ、通路が分岐しているように は見えなかったため、目の前の一番だけ直ぐされた側道へと進んだ。側道をのぼる前前、セルヴァッジャは若干違和感が走った。「なぜ改札も無いのに駅前まで切符を会慨がみるのだろう」。

側段を少し上るとようやく映画館への案内看板が見えた。表記が無いが進んでいることもあり ホッとしたのか少し足取りが軽くなりにむった。「ここから相間違う ことの2回に合いそうだ」。気持ちに余裕が出来たからなのか急にさっきの「駅員の激気み」と「駅員室と切符全慨」が気になり始めた。

「そういえばまだ改札を出ていないけどいつ出るのかしら。」

分析 第三章 ウチ内とウチ外



地下へと繋がる改札を 45 度傾け、壁で切ることで1つの前段には1か所と、また側段を一部のみ改札をとることで、狭さったことに注目させない。

室内看板の示す先は、長いスロープとその先に扉かに見える改札であった。IC カードの残高に余裕がなかったセルヴァッジャは、精算するためにスロープを上る前に配置されのうちこ前券機を操作した。

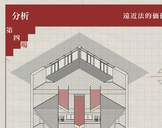
「残高へ3000 円ずえ、不足金額ハヤリマセン、カードヲ返却シマス、カードヲ取リ下ヤイ。」

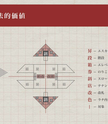
金額が足りないと思っていたため 3000 円もあったことに少し驚いたが、そういえば先日クレジットカードを会慨へ入れたままだった事を思い出した。

スロープは左右にある道路と歩行に開けられた映画館の入口によって立ち止まって感じ、上ることを一瞬ためらった。がすぐに左がわへと行けないことに気づき先に進んだ。

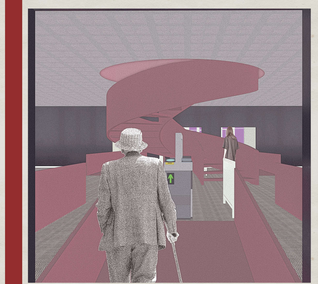
「こんな開けかる丸見えの長い道路を通らないと行けない なんて いやだ。」

分析 第四章 過近法的価値





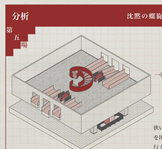
通路を細長くし、その先の部屋の入口をフレーミングすることで欲望を誘う。



一つだけ無造作に配置された改札を出ると、なんの表記もない小に概装飾だけがある部屋に出た。少し戸惑いながらも改札をことは出来ないため上り始めた。部屋の出入り口からエントランスの自動ドアと思しきガラスが見える。「いつの間に他人に出てたのかしら。」いつもうままで地下鉄の改札で立ていなかったせいか地上側に出てきた感覚がなかったのろう。コンコースみたりかな常に どこからか太陽の光が差し込んでいたように感じていたが、ここから差し込んだだだっようろ。

「この概装間近、少し変な気がする。」

分析 第五章 沈黙の概装



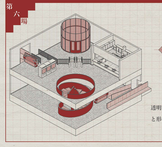
狭い 場所は と感 る 言 いう 心理 を 利 に 、 人 を 行く 有 効 こと と 誘導 する。

映画館のエントランスについたセルヴァッジャは異様な光景を目にする。シアター毎に異なるスレーマーがあるではないか。見慣れないため異様ではあったが、これは非常に合理的だ。確かに通常のシネマコンプレックスだと同じ価値向に複数のシアターがあるため通ってしまうことが多いが、これなら何も考えずに進めるからかあり がたいとセルヴァッジャは思った。さらに、各シアターの入口に貼ってある異なる映画のポスターが異様な光景に拍車をかけていることに気づいた。まるでシアター毎でコンセプトがあるかのようにシアターシネコン就一感いが出ている。ホラー、アニメ、ホラー、ミュージカル…

すでに購入していたチケットを自動券売機で発券した。どうやら“シアター1”で上映するらしい。セルヴァッジャは非認識にシアター1のドアへと進んだ。

「改札を出たばかりなのにまたゲートに入るのね。乗り換えしているみたいだわ。※二章に続く

分析 第六章 ミニシアターの個性



透明で円形のエスレーターは上部から振れる光 を相応によって欲望を誘う。

ガラスのエスレーターに乗ると目的地のボタンは無く、人が乗ったことをセンサーが感知したのか自動でゆっくりと上昇した。エスレーターの天井の間隙から上階からの光がリング状に温れており、なんとも神秘的である。そう感じていると、エスレーターは目的地に着く前にある場所を通過し始めた。上階に着くと鉄道のホームだ。駅が目来たタイミングで間違えたばかりだからなのの間隔としていた。ただ、ホームに数人しかいないのにそたら閑雑を感じ、“見せ物”にされてる感覚を覚えた。

「外からはどのように見えてるのかしら。そうだ、帰りは映画を観て帰ってるることにしよう」

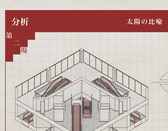
分析 第一章 人間を監視するプラットホーム

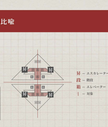
ガラスのエスレーター越しの千行市間は興味を誘う。

エスレーターを降り順路を進むと二つのエスカレーターが現れた。周にあるのは普通のエスカレーターであるが、対照的に手前のものは先ほどのリング状のモようも光に明るく上階の光に照らされていた。先ほどのエレベーターで内の景色に興味を引いていたセルヴァッジャは迷わず乗った。しかし乗った直後、はめやうと何かが見えた気がした。

「他のエスカレーターに“theater1”の表記があった気がしたけど、多分気のせいよね。」

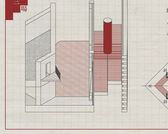
分析 第二章 太陽の比喩





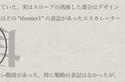
光に飢えた人間は、光を求め、神々しいエスカレーターに 逆む。

光の正体はやはり窓から差し込む太陽の光であったが、外を見たかったセルヴァッジャは少し がっかりした。上階は大きな窓とその外側にスロープ、そしてホーバーのような外況によって構成されていたために満足に景色を見ることの出来なかった。しかし外側の外光をよく見える 1 階層のつくりについてそれぞれであり、望色が見やすくなっているではないか、それに気づいたセルヴァッジャは、逆に右って続く室内のスロープに進んだ。



スロープは建物の内側に沿って螺旋状の間段いた。少し下延度ではあったが外の景色に夢中で意図を歩いていたあるき間隔はなかった。「あれまだそんなに高くないのね。下階くらいかと思ったのだけれど地下鉄からさだくらい。結構上までさている と思ったん。

分析 第三章 消費という檻に囲まれた社会

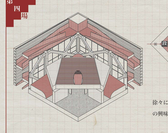


建築内側の窓を消滅させたスロープは人間を意図に誘導し、内側の景を認識させない。

ここで彼色に夢中だったセルヴァッジャは一つ見逃していた。実はスロープの消曲した部分はデザインではなく順路の分岐であった。分岐した順路に進むと先ほどの“theater1”の表記があったエスレーターの順路に戻れたのだった!―

スロープを登り切るとそこには丸い壁に囲まれた薄暗い側段があった。特に順路の表記はなかったが、この側段以外は先ほどと同じスロープしか道路がなかったため進んだ。側段を上り始めると、上った先の部屋の壁以外の情報が何もなくとても閉塞的であった。しかし、後ろから差し込む光によって後ろにも人が来ていることに気づいたため、「順路に間違いは無い」と自めて思った。

分析 第四章 洞窟の比喩



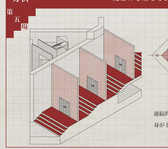
徐々に閉塞的に成っていく空間は人々の興味を誘う。

「シアターはまだかしら。上映時間に間に合うか心配だわ。」

展開のような側段、そして先ほどの側段を抜けような室色な側段をとるようやくシアターの入口と思しき扉が見えた。「思いたみたいね。間に合ったみたいね。」セルヴァッジャは扉分の余裕を持ってつけたことにホッとした。“theater1”の表記が書かれた扉を開けた。すると目の前には同じドアが。「別室のための二重なのかしら。しかし、次の扉を開けてもまた同じ扉が。流石に違和感を覚え一度引き返そうとしたが、扉はオートロックであったため内側から開けられなかった。

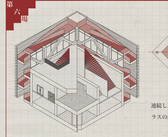
“扉”というのは“何もしなければ閉じており、開ける時には開ける。そしてそれを実行するためには鍵が必要”である。開いている扉にスロープによる 1 の階単だが扉を開けるのは至難である」変わった道徳表現が好人シミュレーションをこのように表現していたことがプラッシュバックしてきた。

分析 第五章 幾層にも重なる表象



連続的な扉に意識が行き、無意識に自身が上階へと向かう。

知らず知らずのうちに道路が開されたセルヴァッジャは“次の扉を開けても同じ扉であったらどうしよう”と思いつつ、思る思る扉を開けた。すると目の前には先ほどと同じ扉の他に前とは異なるタラスの扉があった。「もう扉にはうんざりだわ。見たところガラスの扉の先には階段になってるし、今度こそシアターに着くはずだわ」



ガラスの扉を進むと側段があった。映画館はシアターの間以外にいろある中の階段は世界なりと思いつつ、途中かく概装のようにないっているせいか「やけに急な階段だな」と感じたが、不思議な階段によってみたいとも思った。

分析 第六章 隙間 ―限退しない自由―

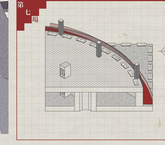
通過した同一の扉を避けようと前方が見えるガラスの扉に進む。

側段をとると室内口があり、やっとシアターに辿り着いた思った。セルヴァッジャは案内口と張目に「theater1 はどこですか?」と尋ねた。

「ここまでご苦労様です。その先からドア2枚(計3枚)の『スペクタクルの社会』が設映シアターです。そこのスロープをとったあとその まま真っ直ぐ中央の階段をとってすぐです。」

駅員と同じ不気味な笑みをこぼしながら伝えられた。「ご苦労様です。という言葉に違和感があった。なぜシアターに行くだけなのにまるで労働後のような表現をしてきたのだろう。そう考えながら言われたスロープをとった。グルリと回るを中心として登り付けられたようなスロープは先が見づらくどこまで続いているのか不安であった。

分析 第一章 消費社会の商車



なだらかで長いスロープは誘導対象を焦らせる。

道外にも不安で足取りが速くなっていたせいなのかすぐに上階に着いた。そこには中心にある階段と下から上って来るエスカレーター以外何も無い void が広がっていた。「いよいよ本当にシアターに着くのかと思わせてきさくれる。順路以外何も無い空間だ。セルヴァッジャはここにきて一緒、この側面的いに異質であることを再認識した。

「みんなが必要としているものは外を全て覆いた合理的な空間とまさにこの核都市そのものだわ。さっき言ってたのはこの側段ね。どう行けばいいのか本当にわからやすいわ。」

分析 第八章 均質化された都市

側段のみの空間は進むから広る監外の選択が出来ない。ただ対象さは「もうすぐ着く」という理論集が働くため、選ぶ行外の選択は出来ない。

側段は中間のようになっており、下を向くと鉄道、上を向くと天都越しに空が見えた。側段をとるその一瞬だけであったがセルヴァッジャは解放的な気分になり、リフレッシュして映画を観れると思った。

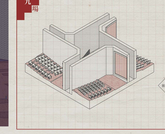
さっきの前段のいった通り、側段をとるとすぐにアーチの入口があった。“theater1”の文字が書かれた部屋に入り、席に座った。「意外と人が少ないのね。人間ABC世界だし今日まこんなもの。」

セルヴァッジャは上映さ れ始めた映画を観て行を始めた。なんと観にきた映画とは別の映画ではないか。しかも SNS でも聞いたことのない映画だ。部屋を間違えたのかと思い、近くの係員に聞いた。

「こちらで合っていますよ。ただいま上映中ですので会員様にお知らせください。途中退室は出来ません。」

「自方ない、『スペクタクルの社会』の上映の こと を伝えるとこにしよう」そしてオープニングが始まった。タイトルは“誘導建築。 ※二章に続く。

分析 第九章 事前に知ってしまう情報

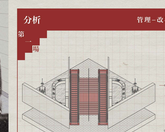


目の前にシアターが現れることで、人々はそのシアターが“選っている”ことを疑わない。

この映画はある特都市に映画館を併設した都が出来たところから話は始まる。物語の世界線は「引中や踏切などの障害が一切ない、“本当の意味での完全な自由”を謳う国」の話であり、それを実現するためには「人間を唯一、物理的に隔てることのできる“建築”という“装置”を駆使して、監視カメラ、改札といった人間の情報を管理し、特定することのできる機械を導入することが必要」ということ。冒頭の“映画館を併設した都”というのがどうからをや“建築装置”なしい。

物語序盤で、主人公は誤って地上に出るための改札を抜けてしまう。

分析 第一章 管理 ―改札―



空間の対称性の違和感が以対間の改札ではなく、側段、エスカレーターへと誘導される。

しかし改札を出て間もなく主人公は違にも出口を間違えたことを伝えていないのに、間違えていることを名前や年齢、顔の特徴などと一緒にアナウンスされる。アナウンスはまさしい動線の最初と会応していないにも関わらず、主人公は違わず進み始める。

そんなや、主人公は駅に仕事中のサラリーマンと違びにきた学生達がどちらも忙しなく動いており同じような行動をしていることに違和感を持ち始める。

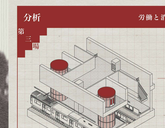
分析 第二章 特定―監視カメラ―

ラチ外へ出たにも関わらず、改札を 1 つも 出 たん 間 は、どちらにいるのかわからなくなる。

駅のコンコースでは 出 歩 てっても 違びであっても 一 方 に 同 に 向かっているため 誰 み合っている。

主人公は「仕事と休息の違いは何なのか」と感じ始める

分析 第三章 労働と消費

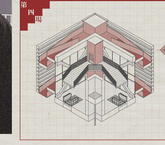


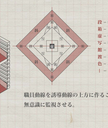
混み合うコンコースによって 誰の経路を 探 さ る。

物語中盤では、そんな違和感を持ちつつもシアターに向かう主人公が、常に人によって「監視されているかシアウンスできたのでは」と気づき始める。

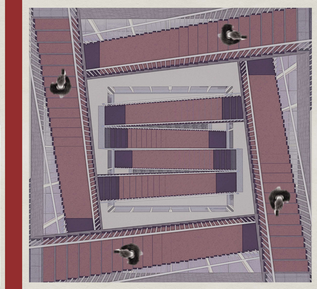
そして、常に主人公はこの建物の中だけでなく、「前の中は“監視する側とされる側”、“側を側と操られる側”で成り立っていることを 指る。

分析 第四章 復讐改癒





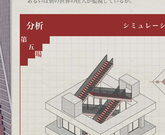
階日前前を誘導前前の上方に作ることで、無意識に底見させる。



死に物語終盤では、その監視は人による もの だけでなく“AI”によっても行われていることに気付く。

あらいは頭の世界の住人が監視しているか。

分析 第五章 シミュレーション仮説



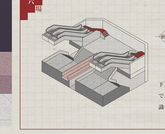
中間の側段は建物に同われた人を無意識に誘導する。

そして物語ラストは、世の中の構造に気づいた主人公が城る途中、行かに使った駅に戻ると、先ほどまでいろいろな人がいる と感じていたのに、なんの制性もない機られた“オブジェ”だ し か 見えなくなってしまった。

物 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

ここで物語は終わった。 ※四章に続く

分析 第六章 オブジェ化



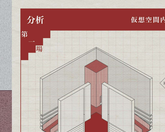
下方する人の視界を遮る壁を取り払う事で、空間に意識が向き、側段を降りる意識を 軽減する。

映画を見終えたセルヴァッジャは もう階の見みはいていたので『スペクタクルの社会』を見だに帰ることにした。帰りは行きに見かけた外側のスロープを通るとそのまま鉄道の改札まで繋がっているとの案内板を見たため、「やはり鉄道で帰ろう」と思った。エレベーターにあるようだがあまり 急いでないため、「ゆっくりだし歩こう。 そう決めてスロープを下り始めた。

セルヴァッジャは目前まで通る道路なのに周辺感を感じていた。それだけでなく、いつも通りの街であるのに、外化の間から見える 側面から 目 に 入 る 全 ての 建物 が 監視 塔 に 見 え 、 人 も 車 も 電車 もそれら 装置 的 に 1 か 全 て に 思 え て し ま う 。 ゆっくり 生 カ ロープ を 降 り な が ら 、 そ ん な 景 色 だ こ と を 感 じ 、 時 間 が 経 っ て い た 。 映画 の 内容 そ の も の だ 。

「監視する側とはこういうことなのかしら。」

分析 第一章 叙想空間内の監視



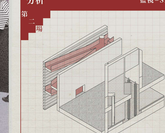
エレベーターの記憶を 光 だ と 認識 し、そもも 側のスロープを 降 り 始める。

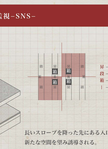
「私は今日、地下鉄を降りてからずっと監視、いや“誘導”され続けていたのかしら。もしかして今日だけでなく、普段無意識を 矛盾してみ てそれ も 一 昨日 SNS で 映画 の 情報 を 見 る か ら と 少 し ょ っ と して 欲 し く な っ た 商 品 が 広 告 に 出 て く る の も 、 と 感 じ 始 め た 。

セルヴァッジャは ぼ ず 大 都 に 住 ん で 数 年 。 一 人 の 少 女 が い た 、 “ 人 の 子 ” と 認 識 さ れ て い る の は 、 さっきまでもがこんな 扉 が 開 か れ て い た の は 、 便利になり続け、AI には ほ ぼ 全 て の 労働 を 任 せ ら れ る 様 に な っ た 現 代 、 私 達 は 何 一 つ 不 自 由 な く 暮 ら せ る 。 あらゆる交通機関も全て AI に任せられる様になったことで、行動するにの障害もなくなった。しかしその裏では建築を基盤として成り立つ、あらゆる監視システムによる安全保証があった。

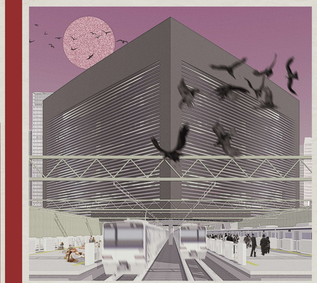
「あの 扉 の 前 世 界 は こ う い う こ と だ っ た の ね 。 ※ 終 わ り

分析 第二章 監視―SNS―





広いスロープを降った先にある AI に新たな空間を強制誘導される。

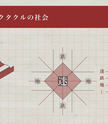


自由とは 会慨 であろ、では会慨とはなんなのか。現代ではこの会慨で行うことが普遍である。消費をするための労働を行うが、人間の行動において労働と消費にたる方法はある 0 択。

この作品は、一見一言前から言われている現代社会の依所を取り扱っている様に見えるが、それと同時に、2045 年の“技術的特異点”から数十年後、あらゆる技百年後に必要とされる建築の有方を提案している。AI が人間を凌駕した時、人間は何を考えて生活、あらゆる消費をし続けられる様になる。そんなや、建築の形態はどのように変化していくだろう。

モダニズムからポストモダニズム、さまざまなと建築の形態は歴史とともに変化し続けている。現代的ないわゆる“会慨のような建築”は現代の建築史上のコンテクストに嘘みついていると に、再度生された都市が世界中に広がるやの姿 と さ れ て い る 。 私 は その に 、 “ 完 全 な ” 「 監 視 、 特 定 、 誘 導 」 と い う 建 築 が 誕 生 る 。 私 は ぼ んやりとそう感じている。

分析 第三章 スペクタクルの社会



いかには切れようと消費するため、人 間 は ま た 高 れ る 。